

ER DU NORD

A.M.CASSANDRE

RD  
RESS

DEUTSCHE REICHSBAHN GES. POLSKIE KOLEJE PAŃSTWOWE



BERLIN VARSOVIE RIGA  
WAGONS - LITS

沢木耕太郎

# 深夜特急

香港・マカオ

しん や とつ きゆう  
深夜特急 1

—香港・マカオ—

新潮文庫

さ 7 - 5



平成六年三月二十五日 発行  
平成七年四月十五日 五刷

著者 沢木耕太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一  
東京都新宿区矢来町七一  
編集部(〇三)三二六六―五四四〇  
電話 読者係(〇三)三二六六―五一―  
振替 〇〇―一四〇―五一八〇八  
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小社読者係宛に送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Kōtarō Sawaki 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-123505-8 C0126

新潮文庫

深夜特急 1

—香港—~~マカオ~~—

沢木耕太郎著



新潮社版



# 目次

## 第一章 朝の光 発端……………七

アパートの部屋を整理し、引出しの中の一円硬貨までかき集め、千五百ドルのトラペラーズ・チェックと四百ドルの現金を作ると、私は仕事をすべて放擲して旅に出た……

## 第二章 黄金宮殿 香港……………三五

黄金宮殿という名の奇妙な宿屋に放り込まれた私は、香港中を熱に浮かされたように歩きまわり、眺め、話し、笑い、食べ、呑んだ。香港は毎日が祭りのようだった……

## 第三章 賽の踊り マカオ……………三五

香港の喧噪と熱狂を離れ、息抜きにマカオに立ち寄った私は、「大小」というサイコロ博奕に魅せられていった——。やろう、とことん、飽きるか、金がなくなるまで……

〔対談〕 出発の年齢

山口文憲  
沢木耕太郎 二〇七



深夜特急 4

シルクロード

第十章 峠を越える

第十一章 柘榴と葡萄

第十二章 ペルシャの風

深夜特急 2

マレー半島・シンガポール

第四章 メナムから

第五章 娼婦たちと野郎ども

第六章 海の向こうに

深夜特急 5

トルコ・ギリシャ・地中海

第十三章 使者として

第十四章 客人志願

第十五章 絹と酒

深夜特急 3

インド・ネパール

第七章 神の子らの家

第八章 雨が私を眠らせる

第九章 死の匂い

深夜特急 6

南ヨーロッパ・ロンドン

第十六章 ローマの休日

第十七章 果ての岬

第十八章 飛光よ、飛光よ

深夜特急 1

—香港・マカオ—

ミッドナイト・エクスプレスとは、トルコの刑務所に入れられた外国人受刑者たちの間の隠語である。脱獄すること  
を、ミッドナイト・エクスプレスに乗る、と言ったのだ。



第一章 朝の光

発端



## 1

ある朝、眼を覚ました時、これはもうぐずぐずしてはいられない、とと思ってしまったのだ。私はインドのデリーにいて、これから南下してゴアに行こうか、北上してカシミールに向かうか迷っていた。

ゴアにはヒッピーたちの楽園があると聞かされていた。それがどのような種類の楽園なのかは定かでなかったが、少なくとも、輝くばかりのゴアの海沿いの土地では、デリーやカルカッタの何分の一かの金で楽に暮らすことができるという話に嘘はないようだった。

一方、カシミールはインドの高級避暑地でもあり、ゴアのような安上がりの生活は期待できないが、なによりも、雪を頂いたヒマラヤの高峰群を間近に望むことができるというだけで心ひかれるところのある土地だった。

〈黄金のゴアにしようか、それとも白いカシミールにしようか……〉

私は迷いながら、しかしいつまでもその迷いを宙吊りにしたままデリーにとどまり、その日その日を無為に過ごしていた。

日本を出てから半年になろうとしていた。

アパートの部屋を整理し、机の引出しに転がっている一円硬貨までかき集め、千五百ドルのトラベラーズ・チェックと四百ドルの現金を作ると、私は仕事のすべてを放擲して旅に出た。

私にとって、千九百ドルという金はかなりの大金に思えたが、実際に使いはじめると減るのは速かった。たとえどんなに貧しくつましい旅をしていても、腹が空けば何かを口に入れ、夜になればどこかに泊まらなくてはならないのだ。しだいに薄くなつていくトラベラーズ・チェックを、一枚、また一枚と切るたびに、果たして俺はあとどれくらい旅を続けられるのだろうか、と不安を覚えるようになっていた。

しかし、私とその朝、もうぐずぐずしてはいられないと思つたのは、必ずしも金が理由ではなかった。

デリーはニューデリーとオールドデリーの二つの地域から成るが、私が泊まっていた宿はニューデリーの鉄道駅の裏手に広がるメイン・バザールの一角にあった。人の流れの激しい、猿雑で活気のある通りに面しており、周囲には、雑貨屋、履物屋、生地屋、錠前屋などが立ち並んでいた。

香辛料を商う店からは、金盥かなだらのような容器に山盛りになされた赤唐辛子やターメリック、あるいはナツメグ、黒胡椒くろこしよ、コリアンダーといった数十種の香辛料が放つ強烈な匂においが複雑にからみあいながら漂い出し、それがバザール全体を覆おほいつくしていた。匂においは宿の中にも流れ込み、私の部屋の壁や天井やベッドにさえも沁しみついていた。

私の部屋、といつてももちろん個室ではない。ドミトリ、つまり大部屋だ。外の通りと地つづきの土間に、インド式のベッドが十ほど無造作に並べられている。要するに、どうか雨露がしのげ、土の上で寝なくてすむ、というだけの宿なのだ。しかし、一泊四ルピー、およそ百四十円というデリーでも極めつきの安宿に、さほど多くを期待する客がいるわけでもない。

宿の親父おやぢは、通りに面した出入口に置いてある壊れかかった机すわの前に坐り、日がな一日ぼんやりと人やりキシヤの往来を眺ながめている。客はその親父に四ルピーの金を渡し、空いているベッドに身を横たえる権利を得る。宿には、そのようにしてベッドひとつ分の空間を自分のものにした若者たちが、これもまた一日中なにをするでもなくゴロゴロしていた。

ドイツ、フランス、オランダ、イギリス、アメリカ、そして日本。それぞれ国籍こくせきや肌の色は違つていても、誰もが嬉々ききとして観光名所を巡るにはあまりにも長くインドにすぎた旅行者だということに変わりはなかった。食事をする時にぶらりと出ていくくらい、そして帰つてくると自分のベッドの上でハシシを吸うくらいしかすることがない。バザール近辺の安

食堂なら一食五、六十円で腹を満たすことができる。つまり、一ドルあれば、どうにか一日が過ごせるのだ。

デリーばかりでなく、カルカッタでも、ベナレスでも、ネパールのカトマンズでも、最下級の安宿には、一ドル前後で暮らせる生活に身を浸し切り、重い沈澱物ちいでんぶつのようにベッドから動かぬ若者が数多くいた。あるいは、私もまたそうしたひとりであったかもしれない。

このデリーの安宿は、カトマンズの一泊七十五円というような途方もない安さには及びもつかなかったが、居心地は悪くなかった。ここにほんの一晚か二晩泊まるだけで、翌朝には元気に次の目的地に向かって出発していくといった旅行者でもないかぎり、他人にうるさく構おうとする気力を残している宿泊者はほとんどいなかった。自分から話し掛けなければ誰からも話し掛けられず、外部からはまったく切り離されたひとりだけの時間を過ごすことができる。そのようなある種の無重力状態は、刺激もないかわりに奇妙な安らぎがあった。

深夜特急 1

たとえば朝、ベッドの上で眼を覚ますと、今日一日どうしようかと考える。考えても何も思い浮かばないので、再び眼を閉じ、そのままの姿勢で横になっている。やがてそのうち、周りのベッドの連中が、ひとり、またひとりと起きはじめ。しばらくして、私もベッドから体を起こし、着古して薄汚れてきたピジャマとクルタを身につける。

起きたからといって急にすることが見つかるわけでもないが、とにかくベッドの傍そばから離

れ、宿の外に出て表の通りを歩きはじめ。まず行くのは近くのチャイ屋だ。

チャイとは茶、インドでは紅茶をさす。インドの紅茶は、イギリス風の気取った飲み方を  
するものではなく、紅茶と砂糖と牛乳を鍋に叩き込み、煮立ったところで茶漉しを通して器  
に注ぐという、粗野だがこつてりしたミルク・ティーがほとんどだった。私は、乏しい金を  
いくらかでも儉約するために朝食を抜き、かわりにチャイを一杯だけ飲むことにしていた。

馴染みになったチャイ屋の親父は、バケツにはった水をくぐらせただけで洗ったコップを  
受け皿にのせ、そこに溢れるほど注いでくれる。まず受け皿にこぼれたチャイをすすり、そ  
れからコップに口をつける。熱すぎる場合には受け皿に少しづつこぼし、さましながら飲む。  
インドではそうした一杯がールピーの五分の一、二十パイサか三十パイサほどだった。私は  
僅か七、八円のそのチャイを、インドの暇人と一緒に時間をかけてすする。

だが、いくらゆっくり飲んだとしても、それで一日が終るわけではない。時計を見るとま  
だ九時にもなっていないのだ。そこで、再び、表通りに出て歩きはじめ。

陽はすでに高く、熱気がねつとりと体からみついてくる。そして、目的のない足は自然  
にコンノート・プレイスに向かつてしまう。

コンノート・プレイスはニューデリーでも最も繁華な場所のひとつであり、そこへ行けば  
何かしらに出喰わすことになる。面倒なことにもぶちあたるが、退屈しのぎにもなる。コー  
ヒー・ハウスを覗けばどんな国の旅行者でも見つけられたし、ロータリーになっている周囲

の通りを流して歩けば、闇ドル買いや偽航空券売りのひとりや二人は必ず声を掛けてくる。そんな誰かの相手をしたり、商店のいくつかを冷やかして歩いていると、どうにか昼になる。私は駄菓子屋でコッペパンのような素朴なパンとポウリングのピンのように大きくて太い牛乳を一瓶買い、近くの公園の木蔭へ行く。そして、鈍重な動きでうろろしている野良牛を眺めながら、これもまたゆつくりと昼食をとる。だが、まだ一時だ。仕方なく、今日の午後は国立博物館にでも行ってみようかと思う。

館内に入り、何千、何万の人の掌によって撫でまわされたため、出っぱった腹に妙な艶の出ているクベラ神の像を眺め、気に入っている細密画を眺め、古色蒼然たるジャイナ教の経典を眺めると、何度目かのこの博物館に見たいものがなくなってしまう。

休憩室でチャイを飲み、六十五パイサで買ったアエログラムに誰にともなく手紙を書きはじめ。しかし、冒頭の一行を書くと、もう別に書くことがないことに気がつき、途中でやめてしまう。

帰りは少し疲労を覚え、宿の近くまでバスに乗る。超満員のバスにどうにかもぐり込み、辛じて片手で手すりを掴み、振り落とされないように必死でしがみつく。降りると、さらに疲労が激しくなっているのに気がつき、思わずひとり苦笑してしまう。そこで、バザールの入口でささやかな店をはっているジュース屋に寄り、マンゴーをしほってもらう。私にとつては、一日のほとんど唯一の贅沢が、この夕暮れに飲むジュース一杯であることが少なくな



かった。

宿に戻り、ベッドの上で少し休み、陽が沈んでいくらか涼しくなりかかった頃、バザールの食堂に夕飯を食べに行く。

決まって食べるのは七十円ほどの定食である。一枚の大皿の上にすべてがのっかっている簡単なものだ。カレーというよりは野菜の煮込み汁といった方が理解しやすい主菜と、チャパティか米飯。あとは、日本の一膳飯屋の定食でいえば味噌汁にあたるダール、沢庵のような役割を持つ生タマネギの切れはし、それにヨーグルトというよりは乳酸飲料に近いダヒーなどがついてくる。

とにかく、そのようにして眼の前に置かれた一日の最初にして最後の豪華な正餐を、まず眼に与え、次に右手の三本の指に味わわせ、それからようやく舌の上に運ぶ。

食事が終ると、もう眠ることしか残っていない。宿に帰ってベッドの上でぼんやりする。やがて夜が更け、周りの連中がそれぞれに寝る仕度を始める。木の枠に網を張っただけのインド風ベッドに、思い思いの格好で横になる。昼間の服のまま眠る者、シーツ一枚を体にもぎつけて眠る者、バスタオル大の布をかけて眠る者。だが、多くは寝袋を敷き、その中にもぐって眠る。外と木の扉一枚でしか仕切られていないこの部屋は、早朝かなり冷え込むのだ。

私もやはり網の上に寝袋を敷き、裸になってその中にもぐり込む。他の連中もほとんど裸